

茅ヶ崎市立赤羽根中学校

研究テーマ：身に付けさせたい力を意識した授業づくり
～「協同的探究学習」と「ユニバーサルデザイン」の実践を通して～

1、実践の目的

本校では、平成30年度までの3年間「身に付けさせたい力を意識した授業づくり～ユニバーサルデザインの理解と実践～」を研究のテーマとし、教師の授業力向上を目指し、言語活動の充実した授業づくりに取り組んできた。生徒の思考力・判断力・表現力を育成するために「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている中、今までの成果を引き継ぎながら研究をさらに深めるために、一・小・中の一貫した環境を生かした「小中の9年間で子どもを育てる」という視点を持つことが重要なことの一つであると考えた。そして、令和元年度より、同一学区の小和田小学校に校内研究の助言者として関わられている東京大学大学院教育学研究科藤村宣之教授をお招きして現在の研究テーマのもと、研究を進めている。

藤村宣之教授のアドバイスから「わかる学力（思考力・判断力・表現力）」を育てる「協同的探究学習（主体的・対話的で深い学び）」の考え方を取り入れている。「わかる学力」を育成するために、まずは解き方や考え方が一つに定まらず、多様な考え方が可能な「非定型の問い」について考える時間を設定する。その後、「協同的探究学習」を通して、生徒が一人ひとりの仲間の考えや思いを認めあう経験を経ることにより、考えることの楽しさを味わい、確かな学力を身につけるだけでなく、協調的な他者意識、自己肯定感も育てていくことを目的としている。

2、実践の内容

(1) コミュニケーションスキルの育成

充実した「協同的探究学習」ができるようになるには、質の高い「言葉の交流」ができればならないと考えている。そのためには「話を聴く姿勢」や「相手に伝わる話し方」などの「コミュニケーションスキル」を高めていく必要がある。コミュニケーションスキルの指導は、「あたたかな聴き方・やさしい話し方」という言葉で生徒に示し、授業だけでなく、学校生活のあらゆる場面をとらえて教師が意識して、段階的に指導をしている。具体的には平成30年度に作成したカラー版ポスター（A1サイズ）【図1】を校内全教室に掲示し、各授業で設定した重点項目を、矢印で適宜提示できるようにしている。対話的な学びの過程において他者を尊重する姿勢や多種多様な考え方を受け入れることを意識することが不可欠だと考える。

「あたたかな聴き方」「やさしい話し方」を実現するために		
聴き方	STEP	話し方
自分の考えを深めたい広めたいするつもりで聴く。	6	日常生活などの経験をもとに自分の考えを話す。
自分の考えと比べながら聴く。	5	人の考えや意見につなげて話す。
話し手の言いたいことを分かろうとして聴く。	4	結論から言い、理由（根拠）を明らかにする。
話を最後まで聴く。	3	聞き手の反応を確かめながら話す。
うなずいたりつぶやいたりして聴く。	2	みんなに聞こえるような声の大きさで話す。
話す人の方を見て聴く。	1	みんなの方を向いて話す。

【図1】

(2) 赤中スタンダードの策定・実施

生徒の学びやすい環境づくりのために、学習環境・学校環境・指導方法の3つの観点から、本校の実態に合わせたユニバーサルデザインを意識したスタンダードづくりを継続して行っている。これは積み重ねてきた校内研究の成果が、新しく本校に赴任したメンバ

ーにも継承されるためにも有効だと考えている。

具体的には授業全体の見通しを持てるような板書の工夫やピクトグラムを用いて取り組むべき活動について提示する等、「みんながわかる。みんなでできる」環境づくりに努めている。今年度は、「ICT機器の効果的な活用」も意識し、視覚的な資料の活用や意見の交流・共有が効果的に行えるよう、積極的にICTを使用し、環境面の充実とともに有意義な活用になっているかの検討をしている。

(3) 授業研究と研究協議会の実施

授業研究を、年3回、それぞれ一つの学年に絞り実施した。事前研究では、教科会での指導案検討を踏まえ、拡大研究推進委員会において教科を超えたメンバーで構成された各研究グループでの授業検討を行った。その後、藤村宣之教授のアドバイスも受け、授業実践に臨んでいる。

研究協議会は生徒アンケートにより、学習者による授業評価を行ったあとに、各研究グループでロイロノートやジャムボードを使い分科会で協議を行った。全体会では、助言者の藤村宣之教授より小中が連携をして9年間で子どもを育てるために必要な視点から赤羽根中の成果と課題についてご助言を頂いている。

(4) 小和田小学校との小中連携

毎年、年に1回ずつ互いの授業研究会への参加を必ずしており、授業づくりや子どもたちの様子に関しての情報共有を図っている。今年度は「小中9年間で子どもたちを育てる」という視点を大切に本校職員が3回にわたり、のべ10名以上が小学校の校内研究会等へ参加をし、積極的な交流を図った。また、Google Classroom を活用し「小和田小学校・赤羽根中学校 校内研究 学びルーム」を作成し、それぞれの学校で使用している資料等の情報共有が図りやすくなるようにした。

3、実践の成果

○学びのスタイルの確立

まず、課題づくりにおいて、多様な考え方や思いを持つことのできる「非定型の問い」を設定することがどの教科でもできるようになってきている。取り組んでみようという意欲のわいてくる発問の工夫についても、職員同士で様々なアイデアが出るようになってきた。このような適切な学習課題が与えられれば生徒が主体的に取り組み、思考力・判断力・表現力が深まる授業になるだろう。

また、学びを深めるためには適切なペアやグループでの「協同的探究学習」の充実が不可欠だという考え方も共有ができてきている。藤村宣之教授からも「生徒が粘り強く考える姿勢や多様な考え方を持つ生徒ができてきている」「グループ内での言語活動がとてよくできており、活発な学びあいができていた。」などの評価をいただき、実感として成果を捉えられるようになってきた。

さらに、このような学びのスタイルを小学校と共有ができていることも成果だと考える。互いに「どのように授業づくりを行っているのか」「子どもたちがどのような姿になっていくことを目指しているのか」など、一小一中の環境を生かし、教師が考え方や思いを共有しながら、小中の積極的な交流を図れていることで、「9年間で子どもを育てる」という視点で、計画的・組織的に学校が子どもの学びを積み重ねていくことにつながっている。

4、今後の展開

生徒の学びの質の向上のために「協同的探究学習」ではペアやグループ活動で学びを完結するのではなく、いかにクラス全体で考えを共有し、個の学びをより深められるかが課題である」など、常に共通の課題を意識して組織的に授業改善に取り組みたい。また、小中9年間で子どもたちを育てていけるよう小中で連携した、計画的・組織的な取り組みを充実させていきたい。